

佐伯 雅子 (国語学・国文学)

源氏物語における「漢字」 —その受容基盤をめぐって—

『源氏物語』は、従来、日本古典文学史において、漢詩漢文とは対極に位置する、和文による日本的な文学作品の代表と目されてきた。もちろん、その通念は誤りではないが、他方、『源氏物語』が唐の詩人白居易の「長恨歌」を初めとする中国漢詩文を相当に咀嚼し取り込んだ作品であることも指摘されてきたところである。本論文は『源氏物語』におけるそのような中国文学の影響について、従来なされてきた中国文学の作品との直接的な対比による影響関係ではなく、中国の経学、詩文を受容することで形成された、平安時代日本漢文学の世界を介しての、『源氏物語』における中国文学、さらには中国的なる発想の影響を具体的に指摘し、考察することを目的とした論文である。

第一部では、『源氏物語』やそれに先行する『うつほ物語』などの和文において、中国渡来の知識・学識に「ざえ(才)」という和語化した漢語を宛てていることに注目し(第一章)、「ざえ(才)」が、「習ふ」「まねぶ」などの動詞とともに用いられ、先天的な「才能」よりも、後天的な「学習」によって、習得されるものであるということを指摘した。そして、その基本的な用法と『うつほ物語』の用例(第二、三章)、『源氏物語』における用例(第四章)を具体的に検証・考察した。ついで第五章では『源氏物語』の影響下にある『栄華物語』『大鏡』など歴史物語の用例をも扱い、物語が漢学をどう捉えているかを検証し、第六章では「ざえ(才)」を人生の指針・目標とした文士の勉学と不遇の意識を考察した。

第二部では、『源氏物語』の作者紫式部の父で、一条朝の漢詩集『本朝麗藻』の代表的な詩人の一人でもあった藤原為時の漢詩・漢文に関わる事績に基づき(第一章)、その紫式部への文学的影響を具体的な詩語や中国の故事に見出し、それらが『源氏物語』の背景として重要な役割を担っていることを指摘・検証した(第二、三章)。

これらの考察を踏まえ第四・五章では、『源氏物語』と同時代の代表的な作品でありながら、漢詩集であるが故に、『源氏物語』研究には利用されることの少なかった『本朝麗藻』について、その編纂意識およびそこに集った一条朝文人によって形成された漢詩文壇の様相を考察した。すなわち、一条朝の代表的漢詩集であるにもかかわらず、『本朝麗藻』には累代の儒家といわれる大江、菅原氏直系詩人の作が極端に少なく、「起家」と称される他家の出身の文士の詩集という趣をもっている。紫式部の父文章博士為時もまた「起家」の文人であった。よってその文人像を同時代の「起家」文人藤原有国との対比を通じて分析すると同時に、『本朝麗藻』の、一条帝、具平親王、藤原道長、伊周、公任、斉信など天皇以下貴顕の詩の重視という一面にも光を当て、『本朝麗藻』が、『源氏物語』を生んだ後宮とも密接な関係にあった漢文学であることを指摘した。

『源氏物語』研究は、ともすれば和文の文脈でのみ論じられることの多い作品であるが、本論文は『源氏物語』を同時代の宮廷の漢詩文的文学営為の場に還元し、その視点から捉え直すことによって、和文的視点からは掬いきれない、有益な指摘に富むものである。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士(文学)の学位を授与されるに十分な能力を持つと認めるものである。